國學院大學学術情報リポジトリ

橘曙覧の和歌と漢詩文との関係について：詩経、漢書、韓非子、李白、杜甫、韓愈、白居易の詩文を踏まえるとされる短歌十八首を中心として

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 前川, 幸雄, Maegawa, Yukio
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000229

橘曙覧の和歌と漢詩文との関係について

―詩経、漢書、韓非子、李白、杜甫、韓愈、白居易の詩文を踏まえるとされる短歌十八首を中心として―

前川幸雄

初めに

橘曙覧の「略伝」「評価と位置づけ」「注釈書」等については、今までに専門家が研究を積み上げられて、詳細なものが出来ている。

しかし、なお、橘曙覧の作品研究には「歌題」、「連作」、「独楽吟」、「本歌取りの作品」、「漢詩文を踏まえる作品の出典が原点からか二次的な別の作品からか」など追究すべき問題は多い。

そこで、ここでは「漢詩文を出典とする、あるいは参考にしている作品」について研究してみたい。

一、漢文学（主に漢詩文）の研究文献

一、一、既刊の研究書

曙覧の和歌と漢文学（漢詩文）との関係について研究した専門著書はない。そこで次の比較的新しい研究書を参照した。

（一）「橘曙覧」（『近世和歌集』日本古典文学大系93）
久松潜一・片桐顕智校注　昭和四十一年　岩波書店
（二）『橘曙覧の研究』久米田裕著　昭和四十六年　柊発行所
（三）『橘曙覧』久米田裕著　昭和五十四年　柊発行所
（四）『橘曙覧　短歌と俳句』久米田裕著　昭和五十八年
柊発行所
（五）『新修橘曙覧全集』井手今滋編。辻森秀英増補
昭和五十八年　桜楓社
（六）『橘曙覧歌集評釈』辻森秀英著　昭和五十九年
明治書院
（七）『橘曙覧全歌集』水島直文・橋本政宣編
平成十一年　岩波書店
（八）『志濃夫廼舎歌集』久保田啓一校注　平成十九年　明
治書院
（九）『橘曙覧の漢詩入門』前川幸雄著
平成二十一年　以文会友書屋

その結果、右の（四）は久米田氏自身の研究のまとめであり、（七）は久米田氏の研究を含めての研究集録であり、（八）は（四）（七）を踏まえて更に一歩を進めた研究であるといえる。ところが、今年になり橘曙覧記念文学館の所蔵品の中から一つの資料が発見された。越中福光の「松の山人」と称する人（松居厳夫）の「井手曙覧大人の歌と漢学趣味」である。これには（四）（七）（八）三つの研究書に含まれないものもある。そこで、その資料と『橘曙覧研究』第一集～第五集と前川幸雄著の論文を含めて研究を進めることにする。

一、二、漢文学関係の記述のある文献

一、「井手曙覧大人の歌と漢学趣味」松居厳夫著
『橘曙覧翁七十年記念祭記念』福井曙覧会　昭和十二年
所収。「漢学趣味」と略称する。
二、『橘曙覧短歌と俳句』久米田裕著　昭和五十八年　柊発
行所。「短歌と俳句」と略称する。
三、『橘曙覧全歌集』水島直文・橋本政宣編注（文庫本）平
成十一年　岩波書店の脚注。「全歌集」と略称する。
四、『志濃夫廼舎歌集』久保田啓一校注（和歌文学大系74）
平成十九年四月　明治書院の脚注。「大系」と略称する。
五、発表論文
（1）『橘曙覧研究』第一集～第五集中の関係記事
「研究」第一～第五と略称する。

（2）前川幸雄著論文

（A）「橘曙覧の短歌への陶淵明の作品の影響について」前川幸雄著　『國學院中國學會報』第五十六輯　平成二十二年十二月。

（B）「橘曙覧と邵雍と―「独楽吟」と「首尾吟」の関係について―」前川幸雄　『国語国文学』第五十号　福井大学言語文化学会　平成二十三年三月。

（C）「越前における邵雍の受容と橘曙覧との関係について」前川幸雄著　『国語国文学』第五十一号　福井大学言語文化学会　平成二十四年三月。

「前川論文A～C」と略称する。

二、既往研究のまとめ

右に挙げた『橘曙覧全歌集』の作品番号を使用し、漢詩文が出典と見られる和歌作品を、中国と日本に大別し、更に、中国の文献は、経、史、子、集に分け出典の成立時代順に、日本のは、時代順に列挙し、作品番号を一覧表にする。

「漢詩文が出典、あるいは影響しているとされる和歌作品の出典文献名と番号の一覧表」

《中国》

【経】「易経」（五経の一）＝67。「詩経」（五経の一）＝252，310，411。「孝経」（経書）＝292。論語（四書の一）＝679、704。

【史】「戦国策」（前漢の劉向〈前七七～前六〉の編）＝432、493、992。「史記」（前漢の司馬遷〈前一四五頃～前八六頃〉の著）＝158。「漢書」（後漢の班固〈三二～九二〉の撰）＝74、337。「晋書」（唐の太宗の時、房玄齢ら奉勅撰、六四八成る）＝638。「五代史」（新旧二種あり。旧五代史、九七四成る。新五代史、宋の歐陽脩〈一〇〇七～一〇七二〉の私撰。）＝780。「南唐書」（五代十国の一。三代で滅んだ。九三七～九七五。）＝617。「蜀志」（晋の陳寿〈二三三～二九七〉の著。三国志の一つ）＝783、995。「宋史」（元の托克托らの編。宋の三百十七年間の歴史）221。「十八史略」（元の曽先之〈一二六五年の進士〉編、初学者用の通史）＝179、992。「列女伝」（前漢の劉向著。堯舜以来の烈女の伝記）＝329．

【子】「韓非子」（前?～前二三四）＝23，504。列子（春秋戦国時代の道家。名は禦寇。伝未詳。）＝704。（「研究」

第一前川、本稿で再考）応璩（一九〇～二五二）＝５０４。天隠子＝２０７。

【集】楚辞＝４３２。王燧（？～一四一）＝１０７。陶淵明（三七二～四二七）＝３８、１８７、３２９、５２２、７５５、９７６、１１０７、１２０３、１４２６（「前川論文Ａ」検討済）。

「岳陽楼記」（范仲淹、九八九～一〇五二）＝５２。賀知章（六五九～七四四）＝５１７。

王維（六九九～七五九）＝２５５、４８４。李白（七一〇～七六二）＝１６３、２６９、５１１、７８０。杜甫（七一二～七七〇）＝２３４、２６９、４７１、４９８、５１７、６６４。孟郊（七五一～八一四）４３６。賈島（七九三～八六五）＝２３６、２５９、５４３、７７０。柳宗元（七七三～八一九）＝２２０、韓愈（七六八～八二四）４３２。白居易（七七二～八四六）＝１０２、４３１。杜牧（八〇三～八五三）＝５４８。張継（七五六前後在世）＝９９５。陸亀蒙（？～八八一頃）＝７３、１９０。于良史（七五六頃）＝３５６。司空図（八三七～九〇八）＝２３６、４７２。邵雍（一〇一一～一〇七七）＝５２０（「前川論文Ｂ」検討済）。梅堯臣（一〇〇二～一〇六〇）＝４９９。蘇軾（一〇三六～一一〇一）＝７４２。

【集・右の他】「茶経」（茶書。唐の陸羽の著、七六〇頃成立。）＝４３６。書言故事（類書。宋の胡継宗の編）＝７８０。

《日本》

「古事記」（太安万侶が七一二〈和銅五〉献上）＝４５５。菅原道真（八四五～九〇三）＝１１９。「和漢朗詠集」（一〇一二〈寛弘九〉頃成立）＝１７８。４３１。元政（一六二三～一六六八）＝９９２。本居宣長（一七三〇～一八〇一）＝６１２。

三、研究対象と方法

本稿では、紙面を考慮して（経）から「詩経」、（史）から、「漢書」、（子）から「韓非子」、（集）から唐代の四大詩人の李白、杜甫、韓愈、白居易、の関係する作品を取り上げることとした。

『橘曙覧全歌集』の脚注等は紙幅の関係であろう、語句と作者名を記すだけの簡単なものがある。そこで、漢詩作品の題名、句数、（分かるものは）制作年等を詳細に記し、短歌と漢詩との対応など、表現の特徴についても検討する。

初めに作品番号の下に文献名を「略称」で記す。歌意は「大

系」を主に「全歌集」等を参考にした。

【経】

（詩経）

252　「短歌と俳句」「全歌集」「大系」

農

暇なの　田廬のしづの　なりはひや　昼は茅かり　夜は

綯索ひ

歌意＝何ともひまのない、田の中の小屋に暮らす農民の生活だなあ。昼は茅を刈り、夜は縄をなって。

「詩経」国風、豳風、「七月」全八十九句の75、76句

75晝爾于茅　昼は爾于て茅かれ

76宵爾索綯　宵は爾索綯せよ

私見＝短歌の四、五句は漢詩の75、76句とピッタリ対応している。出典と見られる。

310　「短歌と俳句」「漢学趣味」「全歌集」「大系」

楳子

雨つつみ　日を経てあみ戸　あけ見れば　摽ちて梅あり

その実三つ四つ

歌意＝雨に降り込められて数日が経ち、網戸を明けて見ると、梅が三つ四つと落ちている。

「詩経」国風、召南、「摽有梅」全十二句。

1摽而有梅　摽ちて梅有り

2其實七兮　其の実七つ

3求我庶士　我を求むる庶士

4迨其吉兮　其の吉に迨べ

5摽而有梅　摽ちて梅有り

6其實三兮　其の実三つ

7求我庶士　我を求むる庶士

8迨其今兮　其の今に迨べ

（以下略）

私見＝1～8句の1、2、5、6句。短歌の四句と漢詩の5句、短歌の五句は漢詩の2句と6句を参考にして七を三と四としている。出典と見られる。

411　「漢学趣味」

洛東岡崎の尚綱のもとより、都にのぼり来よ

とあまたたびいひおくりける、かへりごとに

春たたば　谷のうぐひす　出でたたむ　友を求むる　声を
たよりに

歌意＝春になったら谷の鶯も出て来るだろう、友をさがし求める声をたよりに。

「詩経」小雅、鹿鳴之什、「伐木」全三十六句の1～6句。

1伐木丁丁　木を伐ること丁丁たり
2鳥鳴嚶嚶　鳥鳴くこと嚶嚶たり
3出自幽谷　幽谷より出でて
4遷於喬木　喬木に遷る
5嚶其鳴矣　嚶として其れ鳴く
6求其友聲　其の友を求むる声あり

私見＝短歌の三句と漢詩の3句、短歌の四、五句と漢詩の6句が対応している。出典と見られると思う。

「全歌集」の注に「春日山峰の朝日の春の日に谷の鶯今や出づらむ」（続千載集）、「大系」の注に「あらたまのとし行き反り春立たばまづ我がやどにうぐひすは鳴け」（万葉・巻二重・大伴家持）を念頭に置くか。鶯は曙覧自身のたとえ。とある。何れも二次的出典として理解出来る。

【史】

（漢書）

74「全歌集」

虎　画

聞きしらぬ　獣（けもの）のこゑも　吹きたちて　野かぜはげしき
もろこしが原

歌意＝聞き知らない獣の声も野風によって激しく吹き立てられる諸越原であるよ。

「漢書」、「王褒伝」の句。

「虎嘯而風洌　虎嘯いて風洌しく
龍興而致雲　龍興ちて雲を致す」

「虎嘯風生」と同じである。

なお、「虎嘯」は英雄が志を得て活躍する形容、として、六朝、唐の漢詩作品に使用されている。

例えば、張衡の「帰田賦」、陸機の「漢高祖功臣頌」、陸雲の「南征賦」、范仲淹の「岳陽楼記」そして、後出の李白の「…懐張子房」の1句、等に見える。

私見＝「全歌集」の脚注は［画題のうた。③声と風とに掛ける。「虎嘯而風洌」（漢書）。虎の図は英雄が志を得て奮起する象徴。⑤唐の原。中国の原。］とする。「虎画」という画題の歌であることを指摘し、短歌の二、三、四句の出典

を「漢書」としているようである。出典と見られる。

ただし、歌意は「英雄が志を得て奮起する」という感じはなく、原野で虎が猛々しく吠える様子だけが感じられる。

なお、「大系」の脚注は［○もろこしが原―諸越原。「名にしおはばとらやふすらん東路にあるといふなるもろこしの原」（永久百首・源忠房）が夫木抄では「もろこしが原」となる。歌枕名寄では相模国の雑篇に登録。虎が詠み込まれる。］とする。

【子】

（韓非子）

２３　「研究」第一前川。

野辺に、藁屋つくりて、はじめてうつりけるころ、妻の、かかる所のすまひこそいとおそろしけれ、聞きたまへ、雨いみじゅうなんふる、盗人などのくべき夜のさまなり、などつぶやくをききて

春雨の　もるにまかせて　すむ庵は　壁うがたるる　おそれげもなし

歌意＝春雨が漏るに任せてかえって（盗人が入ることから）守られて住むあばら屋の庵は、壁に穴をあけられるのを心配する様子もない。右の（　）内は前川の補足。

「宋有富人。天雨牆壊。其子曰、不築必將有盗。其鄰人之父亦云。暮而果大亡其財。其家甚智其子、而疑鄰人之父。」（宋に富人有り、天雨り牆壊る。其の子曰く、築かずば必ず将に盗有らむとす、と。其の鄰人の父も亦云ふ。暮れにして果たして大いに其の財を亡ふ。其の家甚だ其の子を智とし、而して鄰人の父を疑ふ）。

（韓非子、説難十二、鄭武公の記事）

私見＝短歌と韓非子の文章とを対照してみると、雨、牆（垣）・壁があり、短歌の詞書には、夜、盗賊がある。漢文には四つが揃っている。漢文の「牆」（垣）が歌では「壁」になっているところが違う。しかし、妻（直子）の不安は、曙覧が貧乏屋が狙われるはずもないという説明だけでは解消されないような不安である。ここの部分は、状況説明（即ち詞書）と「壁うがたるる」という表現に、かなり計算した創作的なものがあると思われる。出典と見られる。

５０４　「短歌と俳句」「漢学趣味」「全歌集」「大系」

蟻

大瀾を　反す堤の　崩れをも　引きいだすこと　ありの土

あな

歌意＝大波を押しもどす堤防の崩壊をも引きおこすことがある、蟻が土に掘った穴であるよ

「千丈之隄、以螻蟻之穴潰、百尺之室、以突隙之烟焚。」

（千丈の隄は、螻蟻の穴を以て潰え、百尺の室は、突隙の烟を以て焚く）。

（「韓非子」喩老）

私見＝出典と見られる。

「全歌集」（これは「短歌と俳句」の指摘）は更に、

細微可不愼　細微慎まざるべし

隄潰自蟻穴　隄の潰るるも蟻の穴よりす

（応璩・応休璉〈一九〇～二二五二年〉

この話も有名でよく引用されている。曙覧が文学作品から学んでいる可能性もある。

【集】

（李白）

163　「漢学趣味」　池無名

勢田の橋　その人とほく　去りて後　すてし扇を　見ほしがるかな

歌意＝勢田の橋でその人が遠く去った後に、捨てた扇を皆見たがったことよ。

1子房未虎嘯　子房　未だ虎嘯せざりしとき

2破産不爲家　産を破りて　家を為さず

3滄海得壯士　滄海に　壯士を得て

4椎秦博浪沙　秦を椎す　博浪沙

5報韓雖不成　韓に報じて　成らずと雖も

6天地皆振動　天地　皆振動せり

7潛匿遊下邳　潛匿して　下邳に遊ぶ

8豈曰非智勇　豈に智勇に非ずと曰わんや

9我來圯橋上　我圯橋の上に来たり

10懷古欽英風　古を懷うて英風を欽う

11唯見碧流水　唯だ見る碧流の水

12曾無黃石公　曾つて無し　黃石公

13歎息此人去　嘆息す　此の人去りて

14蕭條徐泗空　蕭条として　徐泗の空しきを

（李白、「経下邳圯橋、懷張子房詩、下邳の圯橋を経て張子房を懷ふ」五言古詩、全十四句）

（天宝四載〈七四五〉初秋、李白四十五歳、下邳での作。

なお、開元二十六年〈七三八〉李白三十八歳（安旗）説もある。

私見＝李白の13、14句が短歌の二、三句と合っている。短歌の五句の、未練たっぷりなところは、李白の十四句とあっている。出典と見られる。

269　「全歌集」「大系」

搗衣

とほつ人　思ふ心を　手力の　かぎりにこめて　うつやさごろも

歌意＝遠くにいる人を思う心を手の力一杯にこめて衣をうつのか

「全歌集」は、次の李白、杜甫の作品を挙げている。

1長安一片月　長安一片の月
2萬戸擣衣声　万戸　衣を擣つ声
3秋風吹不盡　秋風　吹いて尽きず
4総是玉關情　総べて是れ　玉関の情
5何日平胡虜　何れの日にか　胡虜を平らげて
6良人罷遠征　良人　遠征を罷めん

（李白、「子夜呉歌」その三、全六句）開元二十七年〈七三九〉三十九歳安陸での作。天宝元載〈七四二〉四十二歳作（安旗）説もある。

更に、「全歌集」には、次を引く。

1亦知戍不返　亦た知る戍の返らざるを
2秋至拭清砧　秋至りて清砧を拭ふ
3已近苦寒月　已に近し苦寒の月
4況經長別心　況んや長別の心を経たるをや
5寧辭拷衣倦　寧ろ辞せん拷衣の倦むことを
6一寄塞垣深　一に塞垣の心を経たるをや
7用盡閨中力　用い尽くす閨中の力
8君聽空外音　君聴け空外の音を

（杜甫、「擣衣。衣を擣つ」全五言八句）乾元二年〈七五九〉四十八歳、秦州での作。

私見＝杜甫の7句が短歌の三、四句と、また、8句は、短歌の夫を思う一、二句と、内容がピッタリ合っている。ここは、李白の作品よりも、杜甫の作品の影響が強いと見るべきである。出典と見られる。

なお、「大系」は、李白を挙げている。歴史の説明で一般論であると思う。

５１１「漢学趣味」

牡　丹

置きあまる　露の匂ひも　深見草　花おもりかに　立ちぞふりまふ

歌意＝いっぱいにおりた露の色合いの美しさも深く感じられる深見草は、花が重そうに立ち振る舞っている

短歌の第三句が「牡丹の異名」。

（李曰、清平調三首〈其の二〉）

1 一枝濃艶露凝香　一枝の濃艶　露　香を凝らす

2 雲雨巫山枉斷腸　雲雨　巫山　枉しく断腸

3 借問漢宮誰得似　借問す　漢宮誰か似たるを得ん

4 可憐飛燕倚新粧　可憐の飛燕　新粧に倚る

（李曰、清平調三首〈其の三〉）

1 名花傾國兩相歡　名花傾国　両つながら相歓ぶ

2 常得君王帶笑看　常に君王の笑を帯びて看ることを得たり

3 解釋春風無限恨　春風　限り無きの恨みを解釈して

4 沈香亭北倚欄干　沈香亭北　欄干に倚る

天宝二載〈七四三〉春、四十三歳、翰林供奉、長安での作。

短歌の第二句は、右の「清平調三首」〈其の二〉の第一句の「一枝濃艶露凝香」に似ており、

短歌の第五句は、其の三の4句「沈香亭北倚欄干」とイメージが重なり、出典と見られる。

７８０「短歌と俳句」「全歌集」「大系」

このみてらに伝はれる屏風、久隅守景のかきたる画、さいつ年も見けることはありけるが、今日またねもごろに看もてゆくに、大かたのところにて、守景ぞ、守景ぞ、といひて見するとは、さらにやうかはりて、まことに魂いれて物しけむ筆のいきほひ見ゆ、なかにも周茂叔の手に蓮の華もちてあると、李太白の瀑布見て立てるとの二図は、ことに抜き出でて、しんにせまるとかいふべき画のにほひなり

これやこの　泥のごと　くろがねの　研すりたつ　腕とぞいふべき

歌意＝これがまさに、泥のように鉄の硯を盛んに磨く腕前というべきだ

③④句は、下記を出典とする。と言う。

くろがねの研「鐵硯未穿」（書言故事）

「磨穿鐵研」（五代史）

私見＝「このみてら」＝萬松山大安寺のこと。久隅守景（近世前期の風俗画家、狩野探幽門）の絵を所蔵している。

「叔茂叔の手に蓮の華」＝周茂叔の「愛蓮説」を指す。

「李太白の瀑布見て立てる＝李白の「望廬山瀑布」を指す。至徳元年〈七五六〉五十六歳、廬山での作。開元十三年（七二五）李白二十五歳作（安旗）説、二十六歳作（劉憶萱、王玉璋）説もある。

「大系」は、李白の二作品の題名を紹介している。

「望廬山瀑布水」や「遊廬山瀑布水」がある、と記す。

「水」があるのは、唐写本には其の一に「水」があるということからである。「遊○○○○○」については前川には不詳。

なお、「望廬山瀑布」の其の一は五言で全二十二句。其の二は、七言四句である。其の一の滝は描写が詳しく、其の二は其の一を要約し簡潔に表現した内容である。絵であるから、どの作品を踏まえているとは決められない。

「短歌と俳句」「全歌集」「大系」三書共に、久隅守景のこと、出典のことについて詳しく解説している。

ここに李白の漢詩と関係する和歌の用例はないが、これを見ても曙覧の周辺に絵を通じても漢文学が存在し作者に曙覧が惹かれていることが了解される。

（杜甫）

２３４　「漢学趣味」

幽居花

屋所（やど）のはな　さけば苔路（こけぢ）を　かき掃きて　こてふにぬたり

春の稀人（まれびと）

歌意＝家の庭の花が咲くと、苔むす道を掃き清めて「おいでよ」というのに似ている、春に来る客に対して。

1舍南舍北皆春水　舍南　舍北　皆春の水

2但見群鷗日日来　但だ見る　群鷗の日日に来たるを

3花徑不曾緣客掃　花径　曾て客に縁りて掃わず

4蓬門今始爲君開　蓬門　今始めて君が為に開く

（杜甫、「客至、客至る」全七言八句の1～4句）

上元二年〈七六一〉五十歳作。

私見＝漢詩の3句は「掃わず」とあるが、短歌の一、二、三句と、また、漢詩の4句「君」は短歌の五句と対応する。出典と見られる。

２６９　「全歌集」「大系」

擣衣

とほつ人　思ふ心を　手力の　かぎりにこめて　うつやさごろも

長安一片月　長安　一片の月

万戸擣衣声　万戸　衣を擣つ声（李白）

用盡閨中力　用い尽くす　閨中の力

君聴空外音　君聴け空外の音を

（杜甫、擣衣。衣を擣つ）

私見＝李白の所で述べた。

４７１　「漢学趣味」

夜　山

影垂るる　星にせまりて　薄黒き　色たたなはる　おぼろ夜の山

歌意＝光を地上に投げかける星に迫って薄黒い色が重なり合う、朧夜の山であるよ。

3星垂平野闊　星垂れて　平野闊く

4月湧大江流　月湧いて大江流る

（杜甫、「旅夜書懐、旅夜の書懐」五言全八句の3、4句。永泰元年〈七六五〉五十四歳。

私見＝漢詩の「星」が短歌では「影」にかえられているが、星を指すことでは同じで、着想は同じである。

1風林纖月落　風林　纖月落ち

2衣露淨琴張　衣露　淨琴張らる

3暗水流花徑　暗水は花径に流れ

4春星帶草堂　春星は草堂を帯ぶ

（杜甫、「夜宴左氏荘。夜　左氏の荘に宴す」五言全八句の1～4句）。開元二十三年〈七三五〉二十四歳、以降作（鈴木虎雄）説。

私見＝漢詩の3句の「暗水」は短歌の「薄黒き」にいかされており、4句の「帯春星」の「帯」は「それ（草堂）を一部分に軽く伴なう」の意味が、短歌の三、四、五句の「たたなわる」に成っていて、星の下の情景を詠う点では着想が同じである。

ほぼ同じ情景で、着想が同じであるといえる。出典と見られる。

４９８　「短歌と俳句」「漢学趣味」「全歌集」「大系」

画　石

筆援りて　五日経にけむ　明けがたに　ほのぼの石の　形見せけむ

歌意＝筆を手にして五日経過したであろう明け方に、うすぼんやりと石の形を描いて見せたのだろう

1十日画一水　十日に一水を画き
2五日画一石　五日に一石を画く
3能事不受相促迫　能事相促迫するを受けず
4王宰始敢留真蹟　王宰始めて肯て真跡を留む

（杜甫、「戯題王宰画山水図歌。王宰が画ける山水の図に戯れに題する歌」（楽府体）全十五句の一～四句）上元元年〈七六〇〉春、四十九歳以降作。

私見＝漢詩の2句が短歌の二句と「五日」という日数が同じで踏まえていることは明らかである。なお、漢詩の3、4句のゆっくりと取り組めることが、短歌の三、四、五句に生かされている。出典と見られる。

664　「漢学趣味」

閨　怨

火に弾く　丸の音づれ　懼づ懼づも　吾が背のゆくへ　人に問はるる

歌意＝火によって弾く鉄砲玉の音がする戦場からたまに音信があると、恐る恐るわが夫の行方を自然と人に問うてみずにはいられない

25自寄一封書　一封の書を寄せしより
26今已十月後　今は已に十月の後なり
27反畏消息来　反って畏る　消息の来たらんことを
28寸心亦何有寸心　亦何か有らん

（杜甫、「述懐、懐いを述ぶ」全三十二句の25～28句）。至徳二年〈七五七〉四十六歳作。

私見＝漢詩の27句が短歌の三句に対応している。また、短歌では漢詩の28句と同じような思いは言外に表されている。出典と見られる。

なお、「大系」に「もとは漢詩の題」と記す。言うまでもなく、中国及び日本の漢詩にはこの題の作品は多くある。ただし、短歌の題としては「閨怨」の語は、他では見掛けない（岩波の古典文学大系の索引参照）ので、曙覧に始めて見えることに前川は注目している。

（韓愈）

432　「短歌と俳句」「全歌集」「大系」

宮北君の、草庵とぶらひきて、帰り給はんとする門送り物しけるに、そこの繋がれてある馬の手綱とりて

こは近きころ得つるなるが、心にかなひておぼゆるなり、いかに見給ふや、との給へる、おのれさるすじにはうときものから、すぐれてたくましげになん見なさるる、やがて打ち乗りて、一足あゆませ給はんとする時

千里ゆく　陸奥馬を　われ得つと　鬐なでて　笑めるますらを

歌意＝千里も走る陸奥産の名馬を私は手に入れたといって、たてがみをなでてにっこり笑う偉丈夫よ。

「全歌集」の初句の注に左記の記事がある。

35寧昂昂　寧ろ昂昂として

36如千里之駒乎　千里の駒の若からんか

（楚辭「卜居」）。

有以千金、求千里馬者　千金を以て、千里の馬を求むる者あり。

（戰國策・燕策）

世有伯樂　世に伯楽有りて、

然後有千里馬　然る後に千里の馬有り。

（韓愈〈雑説〉）

私見＝なお、「短歌と俳句」は韓愈の「雑説」を注記した。

「大系」は「千里の馬」「千里の駒」として定着した表現を利用した、と注記している。注記の進展が伺われる。出典と見られる。

（白居易）

１０２　「短歌と俳句」「全歌集」「大系」

牡丹

目をうばふ　さかりは二十日　ばかりなり　国傾けの　花の色香も

歌意＝目を奪われる盛りは二十日間ほどだ、国を傾ける花のように美しい女の色香も。

30共愁日照芳難住　共に愁う　日に照らされて芳の住め難きを、

31乃張帷幕垂陰涼　乃りに帷幕を張りて陰涼を垂る。

32花開花落二十日　花開き花落つる二十日、

33一城之人皆若狂　一城の人皆狂するが如し。

（全四十九句の30～33句）

（白居易、「牡丹芳」〈作品番号０１５２〉七言古詩

元和四年〈八〇九〉三八歳作。長安　左拾遺翰林学士

私見＝この作品は「新楽府」の十六番目の作品で詩題の説明に「天子が農を憂ふるを美するなり」と作品制作の意図が書かれている諷諭詩である。そして、32、33句は「牡丹の艶美に狂ったように夢中になる長安の子女」を描く句である。そして、「短歌と俳句」「全歌集」「大系」が指摘している。

なお、次の句は「漢学趣味」と「短歌と俳句」「全歌集」「大系」が指摘している。

北方在美人　北方に佳人在り
絶世而獨立　世を絶にして独り立つ
一顧傾人城　一たび顧みれば人の城を傾け
再顧傾人國　再び顧みれば人の国を傾く
（漢書、外戚、李夫人傳）

この傾国の美女の話は、美人にうつつを抜かすと城と国を滅ぼしかねないことを知らないわけではないが、美人は二度とは手に入らないよ、という話。後には戒める言葉としても使われて、よく知られている。例えば「長恨歌」にも詠われている。曙覧はそうした漢詩作品から学んでいるとも思われる。「牡丹芳」と「漢書」が出典と見られる。

なお、この短歌は、牡丹の美しさを描くのみで、批判めいた内容ではないが、二つの中国の詩文を読み込んでいる。

一方「全歌集」が引く「咲きしより散り果つる迄見し程に花のもとにて二十日経にけり」（詞花集）は花の盛りが過ぎるまで二十日も見続けたことを云うのみで、傾人傾国の話は出ていない。

431　「短歌と俳句」「全歌集」「大系」
夏月透竹
なつの夜の　月の初霜　おきあかす　竹の下陰（したかげ）　さむくも有るかな

歌意＝夏の夜、初霜がおりたように白い月の光のもと、起きたままで朝を迎えた竹の下の陰は寒く感じられることだ。

「全歌集」は次の漢詩と短歌を引用する。

5風吹古木晴天雨　風は古木を吹く　晴天の雨、
6月照平沙夏夜霜　月は平沙を照らす　夏夜の霜。
7能就江樓銷暑否　能く江楼に就きて　署を銷せんや否や
8比君茅舍校清涼　君が茅舍に比すれば　校（や）や清涼ならん
（白居易、「江楼夕望招客、江楼夕望　客を招く」七言律詩、全八句の5～8句）〈作品番号1374〉長慶三年〈八

二三〉、五二歳作。杭州　杭州刺史、

私見＝「短歌と俳句」は５・６句を「和漢朗詠集」から引いて注にしている。

「新古今和歌集」巻第六、冬の歌、千五百番歌合に　初冬の心をよめる、　皇太后宮大夫俊成の作

「起き明かす秋の別れの袖の露霜こそ結べ冬や来ぬらん」

漢詩の６句が曙覧の短歌の二句に使われたと「全歌集」の注ではみている。一方、曙覧の短歌の三句は「新古今」の初句と同じである。また、漢詩の８句に「清涼」が出ている。この「清涼」は曙覧の短歌の五句に響いているとはいえないだろうか。「清涼」の意味をどう理解するかであるが。

なお、曙覧の短歌は夏の歌であり、「新古今」は「初冬の趣き」の歌であるから、季節の面に注目するならば、漢詩が曙覧の歌に合う。出典と見られる。

「大系」は「全歌集」とは違う漢詩と短歌を挙げている。

○月の初霜―「声ばかり木の葉の雨は古郷の庭もまがきも月の初霜」は白氏文集の詩句として次の１、２句を題とする。初霜は月光の白さの比喩。と脚注に記す。

１葉聲落如雨　葉の声は　落つること雨の如く、

２月色白似霜　月の色は白きこと霜に似たり。

３夜深方獨卧　夜深けて方に独り卧す、

４誰爲拂塵牀　誰が為に塵牀を払はん

（白居易、「秋夕」五言古詩、〈作品番号０４５０〉全四句。元和六年〈八一一〉　四十歳　下邽　京兆戸曹参軍翰林学士

ここに引く短歌の五句は漢詩の２句と合っている。

また、○竹の下陰―「時雨かと過行く風の度々に落ちば打ちちる竹の下かげ」（芳雲集）が数少ない先例。と脚注に記す。

○月の初霜、○竹の下陰、は曙覧の歌にも通ずる用例だと思う。但し、季節は何れも秋である。曙覧の歌は夏であるから、季節のことをから言えば合わない。

終わりに

上に述べたように諸家が出典として指摘された作品、また、既刊の研究書では漢詩との関係を指摘していない作品について、漢詩と和歌の句の対応関係について卑見を述べて来た。

ここに取り上げた４１１、１６３、２３４、４７１、５１

１、６６４番作品は松居厳夫が、２３番は前川が指摘したものであるが、専門家によって、更に吟味もされることを期待したい。

なお、紙幅の関係で今回は取り上げていないが、既刊書では指摘されていない作品が、他に少なくとも七首はあると思われる。これについては既刊書で指摘されている作品も含めて別に研究してみたい。

二〇一六年七月吉日記す。